

氏名	大西伸彦
授与した学位	博士
専攻分野の名称	医学
学位授与番号	博乙第3748号
学位授与の日付	平成14年6月30日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第4条第2項該当)
学位論文題目	Low Incidence of Minor Myocardial Damage Associated with Coronary Stenting Detected by Serum Troponin T Comparable to That with Balloon Coronary Angioplasty (冠動脈バルーン拡張術と比べて冠動脈ステント留置術で生じる軽微な心筋障害は、血清トロポニンTの検出からみてもその発生は低い)
論文審査委員	教授 梶谷文彦 教授 大江透 教授 佐野俊二

学位論文内容の要旨

近年、虚血性心疾患に対する経皮的冠動脈形成術は進歩し、バルーンを使用した冠動脈形成術(PTCA)に加えてステントを留置によることにより再灌流の成功率を高め再狭窄率を軽減することが出来ている。ただし冠動脈内にステントを留置した際の心筋障害は十分には明らかにされていない。そこで我々は同時期に治療された待機的狭心症患者(Stent群29名とPTCA群45名)に対し術後の血清トロポニンT値とCK、CK-MB活性を測定し各治療群での心筋障害を評価した。

TnT値の上昇はStent群では3.4%とPTCA群では8.9%でありCKおよびCK-MB活性の上昇はStent群で3.4と0%とPTCA群では15.5%と4.4%でみられた。TnT値、CK活性、CK-MB活性はいずれもPTCA群とSTENT群において有意差を認めなかった。つまりステント留置に伴う心筋障害の発生はPTCAよりも低く、匹敵するものと示唆された。

論文審査結果の要旨

本研究は、軽度的心筋障害の評価法として感受性と特異性にともに優れた心筋収縮制御蛋白である血清トロポニンT(TnT)を測定することで、ステント留置後の非可逆性心筋障害の可能性についてステント成功群(29名)とバルーン拡張術成功群(45名)で比較したものである。

血清TnT値の上昇はステント群3.4%、バルーン群8.9%と少数例に認められたが、両者間で統計的有意差は認めなかった。したがって、ステント留置はバルーン治療を施した患者と同様にその心筋障害は軽微であることが確認された。この結果は、ステント留置の心筋への影響に関して貴重な示唆を与えるものである。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。